

ノラ

「ぐす……ぐす……ひつく。

あー……ちくしょう、こんな泣かしやがつてよ……ちえつ！」

暫し貴方の胸を濡らし、泣き止んだノラ。

スネたように文句を言うが、その顔は何処か嬉しげなものであつた。その様子に、貴方も操つたい（くすぐつたい）ような気持ちになり、【気になる女にこれだけ思いをぶつけて貰えるなんて、男冥利に尽きる】な

などと、つい軽口を叩いてしまう。

ノラ

「ばつ……何言つてやがんだよ、まつたく！

……それ、誰にでも言つてるんじやねえだらうな？

そういやおっさん……そうだよな。

あの娼婦とも随分仲良さそだつたもんな……え？」

ノラは軽口に文句を言おうとしたが、ふと……その目がいぶかしむよう
に細められた。

どうやら下手な軽口のせいで、彼女に余計な疑いを抱かせてしまつたら
しい。

慌てて、そんな事はないと機嫌を取ろうとするも、少女の顔から険しさ
は取れない。

ノラ

「どーだかなあ……その慌てぶりが怪しいっていうかさ。

……実際どうなんだよ？」

娼婦とあれだけ親しげにしてて、ただ……友達として仲が良いだけなんてこたあ、ないんだろ？」

ノラが貴方の胸元から見上げるようじっと瞳を見つめてくる。

怒っているという程ではないのかもしれないが、その細められた目が妙に怖い。

貴方は思わず言葉に詰まるが……どういう所か知っている彼女に誤魔化しても仕方の無い事である。

渋々といった様子で頷くと、少女の顔が余計に険しくなっていった。

ノラ

「ふーん……あ、つそ。

……まあ、別におっさんは”大人“の男だしい？

そーいう遊びをしてても別に不思議はないけどさあ……ふーん？」

ノラ

「……どういう事すんだよ、ああいう……娼婦と遊ぶ時ってのはよ」

不機嫌になつたノラが、じとつとした目をしながら貴方に問いかける。幾らなんでもそれは言い難いと貴方がたじろぐと、少女が腕を伸ばし、貴方の胸元を掴みぐいと自分に近づけた。

《ぎゅつ！》

(引き寄せる音)

ノラ

「何だよ……ついさつき、惚れた女って言つた相手に對して隠し事かよ？」

……どうなんだ、色々、スんだろ？」

キスとか、他にも……その、大人の……そういう、奴をよ」

先ほどまでの涙の名残で潤んだ少女の瞳を間近で見せられながら、すぐまれる貴方。

惚れた弱みというべきなのか、力であればすぐに振り解けるはずの彼女の拘束が、やけに強く感じられて逃げられそうにない。

どんな羞恥プレイなのかという思いを抱きながらも貴方は、

【それは……そういう場所、だからな】

と、言葉を濁しながら彼女の言葉を仕方なく認めるしかなかつた。

ノラ

「むつ！……ふーん、そつか、そつか……ふーん？

まあ……まあまあまあ、別に、いいけどさ！」

オレは、そういうの気にしないし……ふんつ！

……そういや、おっさんって最初の頃もオレに、奉仕しろみたいな事言つてたもんな？

……おっさんってやつぱエツチっていうかよ、おっさんらしいっていうかよ、ドスケベっていうかよ！！
ふーん……ふーんだつ！」

貴方の胸元を掴みながら、ノラが唸るように不満を告げる。
何をどう言つても、今の状況では彼女の機嫌が收まりそうにないのを察した貴方は、頭が痛くなるのを感じながらどうしたものかと悩んでいると……ふいに。

ノラ

「……なあ、おっさん。

……キス、してくれよ」

突然少女がそう言つてくる。

何を急に言い出すのかと驚く貴方の目の前で、少女は顔を赤くしながら言葉を続けた。

ノラ

「娼婦にしてて……オレに出来ねえってこたあねえだろ！
オレだつて、女……なんだし？」

そういう、キスぐらい……もつと先の事も、やれねえとは、言わせねえぞ？」

《ぎゅつ》

(力を込め、より顔を近づける音)

ノラがそう言い、より一層顔を近づけようとする。

まだ若々しく、瑞々しく張りのある唇が近付いてくるのを感じながら、貴方は慌てて彼女を制止する。

【いきなり何を言つてるんだ！　何も無理をする必要はないだろ？】
つと。

ノラ

「うつ……。

ん、んな事は分かつてるよ！！　でも、でも……オレは、……おっさんと、キスしたい。

だって、ヤダもん！　娼婦にそういう事出来るのに、オレには出来ないなんて事……オレ、絶対ヤダ！」

ノラ

「だから、シテ……欲しい。

オレ、負けたくない……女として、おっさんの相手を出来るって、證明したい。

だつて、だつて……おっさんがオレの事好きって言つてくれて、オレだつて……同じ思いで！

それなのに出来ないからって思われて、そういう吐き出したいものは別の女の所に……なんて思つたら、耐えられないもんつ！

そりや怖いし、緊張してるし、なんか……どうしようもなく頭がぐるぐるする思いはあるけど！

でも、おっさん相手を出来るつて証明出来ない方が、ずっとヤダ！」

ノラの顔が、くしやりと歪む。

それは、彼女の不安の表れだったのかもしれない。

母親に裏切られ、父親に売られ、娼婦として男に抱かれる日々を過ごす
しかないと覚悟していた少女が持った、たった一人抱きしめてくれた貴
方まで失いたくないという不安。

ここで、彼女にキスをし、抱いてしまうというのは簡単なことだ。
だが、本当にそれでいいのだろうか？

勢いに任せてしまつては、かえつて後々彼女を傷つける結果になるので
はないだろうか？

そんな心配をし、動くに動けなくなつてしまつた貴方に、

《ぎゅつ！》

（再び、力を込める音）

ノラ

「……つ！ んつ、ちゅつ！！」

焦れたようにノラが、強く力を込め貴方の頭を下げさせると……彼女の
唇と貴方の唇が、重なつた。

ノラ

「んつ！？ つたあ……。

うつ、なんだよ……キスって、痛いんだな。

皆、こんなものありがたがってしてんのかよ……」

キスというには勢いが強すぎ、当たった唇から骨を通してごつんという衝撃が伝わってくる。

思っていた通りのものではなかつたためか、ノラは痛そうに目を細め、唇を尖らせた。

【こんなものがキスの訳あるか、バカ】

と、貴方は彼女の唐突の行動を嗜めるように怒る。

……その中に、少しだけ彼女の行動に対してもどきりとした思いが混ざつていなかつたと言えば、嘘になるかもしれないが。

ノラ

「う、うるせえなあ……知らないんだから、仕方ないだろ！」

……そんなに言うなら教えてくれよ、おっさんが……ちゃんとしたキス、つてのをよ。

じやないと、オレ……ずっとこれを、キスって事にするからな！」

貴方の言葉に不貞腐れたようにノラが頬を膨らませる。

放つておけば、間違いなく彼女はずつとこれをムキになつて続けるのは、想像に難くなかった。

どうにも彼女に振り回されてしまつているのを感じてはいるものの。

それでも……ここまで彼女が思いを固めているのなら、彼女がそこまで

不安なのならば、応えるべきなかもしれないと、貴方は心を決めた。

【優しくするし、出来る限り痛くないようにもするが……絶対なんて約束出来ないからな？】

と、貴方は彼女に確かめるように、彼女に囁いた。

ノラ

「あ……。

……ん、うん……それでいい。

へへ♪ うん……それでいいよ。

オレ……あたし、おっさんになら、少しくらい痛くつても……ちゃんとシテ貰えてるんだって思えて、嬉しくなれるもん」

ノラは貴方の……ある意味、敗北宣言でもある言葉を聞くと、嬉しそうに頬を緩ませた。

瞳に先ほどまではとは別の、潤んだ色を浮かべながら、手折られると言われているのにそれが幸せというように……華やかに笑みを浮かべる。

ノラ

「……シテ、下さい。

あたしに、貴方が……傍にいるつて、思わせて下さい。

貴方が傍にいてくれて、すごい幸せだつて、あたしも……いっぱい、いっぱい、頑張つて……応えますから。応えさせて……下さい」

男勝りに荒っぽい口調をしていた彼女が、幸せそうに言葉を紡ぐ。その変化に、驚きながらも、貴方も覚悟を決め……今度は貴方から彼女に顔を寄せる。

そして……。

ノラ

「ちゅつ……ん、あ……♪

……へへ♪ 今度は痛くないや♪

柔らかくて、暖かい……へへ♪

……おっさん、ね？ もう一回……キスして？」

唇を触れ合わせるだけの、子供同士のようなキス。

けれど、それは不思議な程胸の中が暖かくなるようで、彼女もまた同じようであつた。

ノラの可愛らしいおねだりに頷いて応えながら、貴方は彼女の腰を抱き、そのままゆっくりとベッドへ運ぶ。

『しゅる……どさつ』

(ベッドに運ぶ音)

ノラ

「んっ、あ……おっさ、ちゅつ♪ (※「」でベッドに寝かされる)

ちゅつ、ちゅつ……んっ♪

……ふ、へへ♪ 優しく……食べててくれよ？

「へんつ、ちゆつ」